

自由図書の一部 最優秀賞

鈴木亜優美さん 文学部英米文学科3年

『クリスマス・キャロル』
チャールズ・ディケンズ著 / IBCパブリッシング

「あなたの現在の行いはすべて未来のあなたへの投資である」

因果応報という言葉にもあるように、善い行いをすれば、未来の自分が善い行いを受け
るが、悪い行いをすれば、未来の自分にも悪い行いが返ってくるということである。そこ
で、未来の自分のためにも善い行いを積んでいくべきである。

本書は、クリスマスを舞台に、いまや多くの人に名を知られているチャールズ・ディ
ケンズが書いたものである。では、「クリスマス」にどのようなイメージがあるだろう
か。イルミネーションやプレゼントなど夢や希望にあふれたものであるだろう。しかし、
ディケンズの生きていた19世紀初頭のイギリスでは、そのような煌めいたものではな
かった。つまり、産業革命を経たばかりのイギリスでは、急速に工業化や産業化が進ん
だ結果、失業者や長時間労働などさまざまな社会問題が噴出していたのである。

この状況を打破するために、彼がとった行動が本書を執筆することだったのであろう。
この本では、主人公のスクルージが自身の「過去・未来・現在」を三人の聖霊に導かれ
てみに行く。まず、過去では、なぜこのような強欲で部下に対してもひどい扱いをする
スクルージが出来上がってしまったのかということが描かれている。つまり、ディケン
ズは、この部分でもとは優しい人であっても、育った環境や社会的要因によって、悪い
要素が付与されていってしまうと述べたかったのではないか。さらに、未来では、現在
のような行いをスクルージが続けた結果として、行きついた彼の未来を描いている。そ
れは、スクルージにとって想像を絶するものである。この末路を打破するために、彼は
現在に帰ってきてから、態度を改めることとなる。ここで、ディケンズは、悪い行い
には悪い行いで返されるので、それに気づいて正すべきだということを述べたかったの
ではないか。

本書の社会的背景と登場人物を比較してみると、スクルージが雇用主の表象で、彼の
部下が労働者の表象だということができる。そして、貧しい環境の中で生きてきたディ
ケンズは、自身に照らし合わせ、雇用主が労働者に対して、敬意を払わないことに不
満を募らせていたのではないか。そこで、スクルージを表象とする雇用主が労働者にも
正当な給与を支払い、正当な扱いをすることを訴えかけている。これを言い換えると、
ディケンズは自身のような弱者に対する扱いを改善するようになることを願い、図書を

通じてそのことを社会へと訴えかけているということである。

本書は、発売してから約1週間で6000部を売り上げる大ベストセラーとなった。つまり、それだけ与える影響は大きく、善行をすることで、未来の自分へ善行が返ってくるという本書は、雇用主のような中産階級の人々の心を改めて、労働者階級の人々に対しても思いやりを持つ人々が増えていった。実際に、米国ニュースダイジェストによると、「宝島」や「ジキル博士とハイド氏」の作者として知られるロバート・ルイス・ステューヴンソンは、同作を読了後にこれまでよりも多くの寄付を行うと宣言していた。つまり、ディケンズの狙い通りに社会を変化させて、労働者階級の人々の生活を改善していくに至ったということである。その結果、現在の私たちがイメージするような「クリスマス」という夢や希望にあふれたものが出来上がっていったのである。

チャールズ・ディケンズの『クリスマスキャロル』が社会に与えた影響は大きい。この本がなければ、現在のようなクリスマスはなかっただろう。そこで、現在の私たちも本書を読み、現在の自分の行いを振り返るとともに、善行をしていこうという気持ちを再確認することが必要となる。

参考サイト

米国ニュースダイジェスト「チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』がかけた魔法」、2015年11月19日、

<http://www.news-digest.co.uk/news/features/14375-charles-dickens-christmas-carol.html>。